

アルツール・ネイバを難す

米國內學交教師四百名

日本移民に
難点はない

つて家族掃討し来たもので役
て日宗アザル人の兵役に服
し得るような條件のものが非常
に少い譯である、その上聖州軍
隊は殆んど全部北伯人の志願兵
で占められ聖州人自身兵役志願
するものがない實状にある。だ
が日本人第二世で決しよくスカ
ウトたるものは決して少くはな
い、罪はこれら日宗伯人には全
くない。

日本移民に
難點はない
ワルドミロ將軍談

前聖州市政官ワルドミロ・リマ
將軍は頃日ア・ナツソン 紙記者
に對し左の日移民觀を語つた
日本移民に就いては今迄に何
回となく發表もし余の報告書
にものせてある、余は何でも
熱意の上話すので一度發表し
た以上減多に意見を變へない
習慣だ

と秘書に報告書を持つて來させ
頁を繰りながら
日本移民に就いてはこゝに書
いてある、州労働局に命じ日

ブラジル輸入額

トロ視察報告の中に
一般的米作の外同地では甘藷
栽培の専門的栽培にあら茶の
煙草に到つては更にすばらしく
既に若干輸出されてゐる
と述べてあり、しかも右は一九
二四年のことで十年後の今日は
誠に隔世の感がある、即ち海外
興業會社一九三二年の發表によ
れば一九九一年一七〇八ト八百の
ものが、十一年には三十三〇ト
の紅茶、三〇トの綠茶を產出
してゐる

九三三年度ブラジル輸入貿易を
見るに
數量 三八七・五五ト、三、四三三・三六ト
價格 二二五、五四磅、一、五六八、六四磅
前年比に比し五十八萬三千三
百四十四千磅増加、六千三百
八十八千磅の増加を見、輸入不
振を氣遣はれた爲特管理による
影響も全く杞憂に終つたかの觀
がある

これを過去五ヶ年間の成績に
比較すると數量並に価格は於
ては三〇、一九年に及ばず
正に二分の一に及ばない、試みに英
貨のみについて最近五ヶ年間間
の輸出入狀態を一瞥せば左の如
通りである(單位千磅)

	輸出	輸入	入超
數量	九三三	一、七六一	七七八・五五
價格	三六、六元	一、七四八・四八	一、四八一・八二
數量	九三一	一、七五七・三七	八二六・四五
價格	四七、五圓	一、三二二・二三	一、四一五・二二
數量	九三〇	一、六六五	八六四・六六
價格	四九、〇圓	一、二七六・八二	一、四一五・二二
數量	九三三	一、七六一	七七八・五五
價格	三六、六元	一、七四八・四八	一、四八一・八二

【一】 サンパワロ オノリオ・デ・シロス

過去數年來サンパウロに在つて日本移民反對説を固持して來たオノリオ・デ・シロス氏は去十二月又々當市フオリャ・ダ・マニャン紙上に大様左の如き一文を寄せ日本移民は之を制限すべしと結んでゐる

は人重問題である、博物館

づ最初に考へねばならないのは
 人間問題である、博物館長
 ロケット・ピント氏の研究に
 よればブラジル人は大體左の
 通り分けることが出来る

白人型	五一%
ムラート	二二%
カボクロ	一一%
ネグロ	一四%
インディオ	二%

形成に留意しないような國民
 は國民の名を辱しめるものは
 だ」といひ更に「我々は先づ
 その人類型を形成する分子の
 選擇をせねばならぬ、而して
 それは當然我々の權限にある
 といふことを諸外國人に知ら
 しめねばならぬ」と説いてゐ
 たが眞に時宜に適した味あふ
 き至言であると思ふ

輸出貿易

[illegible]

がある、第二位

[illegible]

經濟ブロック形
曲つてゐる

[illegible]

一九三二 五、五四三

[illegible]

濟策を講ずるよ
つすべきでなか

組するものでない
我ブラジル人の中に白人型が五
一％しかないといふことは忘
れてならぬところだ

ーペン・ド・アマラ

現在ブラジルが誘入し得るは
黄色移民をおいて他にないし
いひ、若しこれをよき制限し
ようといふは現に世界各國が
ハチ切れさうな過剰人口に悩
まされて居る中、獨逸とイタリヤの二國を除くならば、他は皆
現はれる旱魃地帯を除外せざ
るべからず、さすれば居住可
能面積は五百萬平方キロ、一
平方キロ當り七人とて、人口
稠度になるものと見るべきで
ある。又云つゝも、獨逸とイタリヤの二國を除くならば、他は皆

バ州
アラ州
グナ州
アマ州
マゾ州
マトグrossoを通じてメ

一〇〇〇〇

がこれに對して

が、生憎我等は南十字星下に
生れ彼等は日出の國に遺憾だ
思ふようにならぬの國は遺憾だ
一般の者はたとひ大帝國たら
ずとも小さいながら自分等の
言語、風俗、習慣、人種、宗
教及び歴史を習得育てようと
いふのが眞の希ひだ、フオリ
ヤ記者は日本人の引合に土人
を出して攻撃したが、あれは

がこれに對しては
ケツト・ビンツ氏の
言葉をもつて答えよ
う「人口の稠度は植
民論者の騒ぐ程一國開化の條
件に至大の關係はない、先進
國を以て誇るアメリカへ一
キロ平方の人口僅か十五人に
過ぎぬ」

彼は更に續けて、ブラジルは

ベルナムブコ州	二五
アラゴアス州	二四
パライバ州	一八
セアラ州	一七
エスピリト州	一五
セルジッペ州	一四
北リオグランデ州	一三
ミナナス州	一二
南リオグランデ州	一一
聖カタリナ州	一〇

似してゐる、イタリヤの百
十人、ポルトガルの六十五
程度の稠度は問題外とする
統計の證するところに依れ
ブラジルの現人口増加率は
十年に倍加するといふから
九八〇年には一億人即ち平
キロ當り二十人になるも
見られる

[illegible]

場所はソロカバナ線クワタ驛近
交通は至便、各ロツテに公道貫通し清水流るゝ
地味は肥沃で地形は申しぶんなし
衛生はの病死者なし
作物は珈琲、米、豆、麥、棉其の他万作に適し出口這入
地價は口物を見て頂けば實證します
地權は大勉強アルケール三百五十軒の三年賦で無利子
視察は絶対確實責任を負ふます
問合は御遠慮なく左記へ、ソロカバナ線クワタ驛七五

藤井萬治

コロノ募集!!!

リオ市から六十キロの地、二千エクタールの耕地に日
本人コロノ入植希望、條件極めて有利、希望によつて
は漸次に地主たり得るよう便宜計る、詳細御照會は葡
文で左記へ

Dr. Ligotti

Rua General Pereira da Silva, 86
Niteroy, Estado do Rio

蔬 菜

仲買委託販賣及運搬業、新米スカ上等、骨
粉安價にて提供致します

蔬菜になくてならぬ

イマツ殺虫劑

堅牢無比な

日本製自轉車

中央線取次販賣所

中央線モヂ・ダス・クルーゼス驛

阿南商店

トレーゼ・デ・マイオ街六一
電話三三二一 郵函三三八
電略 TANAN

参加チーム

少年オリ

▽：第三回少年オリンピックは去る十五日日曜午後三時呼物たる明、朗快活なる少年である、この意味において邦人達の入場式第一二世がどんな成績を残すかは二兩日の競技で判明する

れく、團旗をひるがへして、壯烈に我々同胞ばかりでなくブラジル人その他諸外國人間でも多大の興味を難いであり、ゼルマニヤの役員連など非常な期待をかけるが、その結果は第二第三日たる次週の土曜、日曜（廿一日）二兩日の競技で判明する

聖州水上選手權大會

新記録ただ一つ

さびしい成績

ゼルマニア運動俱樂部で去る八百米自由形 一、七〇、五〇〇 日聖州水上選手權大會を催した四百米 同 五、四〇、四〇〇 が別表の通り記録は百米背泳に千五百 同 三、八〇、〇〇〇 新記録を作つただけで大した進歩は二百里平泳 三、三八、四〇〇 はみられてゐない、試みに現在二百米平泳 二、二〇、八〇〇 在世界の水上王國たる日本水上含め女子 記録と今回得られた成績と比較 してみると	聖州 日本 分秒 分秒 四百米リレー 一、二、四〇〇 二百米自由形 一、三〇、四〇〇 四百米 同 七、四〇、五〇〇 二百米背泳 一、四〇、六〇〇 二百米平泳 一、七〇、三〇〇 四百米リレー 三、四〇、四〇〇	▼男子
--	---	------------

岩波菊治選

たまたまに町を離れて青々し山
谷川を見れば親しも
祖父の計をききて
故郷祖父の計音にま悲しきお
故郷偲ぶ思ひあらたに
外つ國に住まふこの身はひとし
ほにうら悲しくも亡き祖父思ふ
この一日雨降りやます家に居て
むづかる吾子を持て余しをり
評 第三句如何

○ 鈴 蘭
は今を盛りと咲き出でにけり
咲きそめし數々の花を束にして
父と兄との墓に参らす
評 今回の出来よし
○ 石和雅重
暖かき日和つぎて梨桃の花芽
伸びたつ我が畠かな
うつうつと眠りに落つる快き庭
の若葉に風をよぐ音
剪定に余念なき父の丹精は葡萄
の花芽多きをぞ言ふ

木村圭石選

夏秋雜詠 (三月)

○プロミツソン 飄骨

西瓜食む人輪の中の女かな
吠えて居る門の小犬や夕涼み
夏草に抽き出て高し花煙草
遠くから日傘娘の會稱かな
稻舟や垂穂の落す小渦卷
公園の柳しをれて秋の立つ
掛稻の露の雫や地に小穴

○文化植民地 南仙子

尖らせし鉛筆かじる秋の灯に
飛行機をかくして雲の秋近く
涼しさや砂に子と描く馬車と
稻麻を刈る夕べを孫と歌ふ父
訪ね来友の語らず月に座す
鐘を撞く女や穗草ゆれてゐる
すねて娘の土に描きゐる秋近く

○チエテ 如是

秋の夕暮多餘に野に石疊道
尺晴や大迷ひ込む野飛流
針金の十駄風に揺れ流れ
振り上ぐる鍬に當りし蝗かな
戦ぎ立つ葉裏芋虫透いて見ゆ
脛曲げて跳ばん氣配の蟬哉

○芭蕉 冬 責

虎猫の芭蕉を上る良夜や
殘月や野豚の齒音さえて居り
半ば枯れ半ばは青き糸瓜かな
積亂雲南に多し秋日和
時置て豆はざる秋日和
荒果し小屋の糸瓜も枯れにけ

○ボラ第一區 蝶 鱒

蟋蟀の吾より去らぬ夜のメー
雨宿り歸りに南風貰ひにけり
蟋蟀の稻刈る袖に飛びにけり
朝露や稻刈る腕に穂の重み

○ステベンソン 竹 枝

閩拳選手權

最近アメリカ、フロリダ州のセント・ピータース・クラブで發らしい拳闘試合が行はれた。選手の方片がキューバのハヴァナから出て來た七十八才の老雄エモリー君、相手はニューヨークのハンブシャー・ミロ・レーキの住人ヤング君で當年として七十九才、審判がマサチューセッツ州ウースターのエルドリツ君で驚くべし、れ百二才といふ長壽者、恐らく世界最老年選手權試合と稱しても恥かしからぬ一戦だらうといはれてゐる

驚異的大記錄本

シカゴ十二日發、米國新進の水泳選手ワシントン州シヤトル市のジャック・メデイツカは四百米自由形で四分四三秒二の驚異の記録を出してジャン・タリスの世界記録四分四七秒を破つた。現在の世界記録は我が牧野の四分四六秒四であるが右が事實とすればこれを二三秒余短縮した超人の記録である。

出場、走高二等（一六六〇）棒高二等（三米三〇）在伯邦人タイ記

エメボイ
朝倉活躍

先日ゼルマヤ俱樂部は同クラブ所屬選手と常市工科大學との對抗試合をやつたが、エメボイとしての朝倉君はゼルマニヤ選手として

聖州聯盟に保管

先頃ブラ拓から當市陸上聯盟に
寄贈された朝日新聞優勝旗に對し
ては同聯盟から丁重なる謝辭と
共に次の通り懸賞とする旨ブラ
拓宛回答があつた

Elixir Nogueira
grande depurativo
de sangue

梅毒妙藥

萬國藥店に有り

Elixir Nogueira
grande depurativo
de sangue

梅毒妙藥

萬國藥店に有り

木村圭石選

ベランダに傘し忘る秋の雨
夕立に宿借る露おししばしかな
○ 選者吟
七つ八つ星を宿して月の暈
片蔭に待ちて道闇に岐れ路
椰子高く仰ぐや雲は月を吐く
忘れぬやシンガポール扇椰子
新道の往來稀なり秋の風
〓 訂正 〓 夏季雜詠(二月)の風
終の
朝駒の足掻きかろく青嵐
は辰巳兄の句にて靜川兄のは
たゞ鳥の聲のみとなる茂り哉
せゝ鳥の樹の間に洩て夏木や
朝霧や斐つくろへる薄化粧
の三句にて全然脱落してゐき
す。

速迅

丁寧



正確

廉價

自動車修繕工場

安樂明善

Rua Fernão Dias, 2-13 - Pinheiros
S. Paulo

り受付ける事と致候に付御承知相成度候

左 記

一、一九三四年（昭和九年）度事業計劃及豫算案
審議の件

一、役員選舉の件

一九三四年四月十日

在ブラジル日本人同仁會

會員諸彦

土地賣出し

▽肥沃地、氣候好く、リオ聖市サントス三地へ交通至便

▽各ロッテ二域以上、一域に付一コント乃至一コント五百、總面積五百域、バタ、果樹、野菜、米作最適地

▽日本人入植者既に十數家族、入植御希望の方は毎土曜中央線スザノ驛でロベルト・ピアンキ氏を御訪ねあれ

▽汽車實聖市より往復僅九百レイスノルテ驛發列車六時二〇〥七・四四〥八・五〇〥九・二九

中央線スザノ驛
 バル、エル耕地代理人

原田敬太

大統領候補に
ゼツリ才氏擁立

前後五ヶ月を費した憲法議會も正常にゆけばあと旬日を出でずして閉會を告げるので、その直後に行はるべき初代大統領問題、は當の憲法以上に政客から重視されるに至つた、中にも九三〇年十一月以來銳意その理想の實現に精進して來た革命派は今その政權を立憲政府の手に渡さんとするに際しては深汎廣狹の差こそあれこれを出來得べくんば

メデイロス・ネット氏と語り再選賛成派の三五の執政官を語ひ同じくゼツリオ氏を初代大統領候補に推薦する運動を起したのも

右はメデイロス氏によつてゼツリオ氏の諒解圓滿につき宣言文はゼツリオ氏の署名を得た上メデイロス氏以下發議人署名は本十八日より一地位の賛成を求むる筈だが地位に不足のない多數黨首領の發

日を以て締切られたが議長は提案者側の便宜のため午後九時までは受付けた、その總數實に二千五百餘通といはれる

右修正案は翌十四日憲法委員會へ廻付されたが同委員會では院内規則によつて五日以内意見を附して本會議へ廻付する筈のところ修正案が餘りに多いので二日間延長の許から結局今週一杯委員會の許にある譯で

議けんぽうしうあん會かいにおける
憲じゆり法ぽう修しう正せい案あんの

ついに提出さる

排日策動何處まで續く？

排日家ミゲル・コルト氏一派が性懲りもなく更に別個な排日の修正案を作り運動中なる旨は既報せるところなるが右修正案は提出期限最終日即ち十三日午後五時遂に議會に提出された

擔ひ國家治安の抑えとなる大
統領の外はこれの際各大臣、執
政官の再選を廢すべしと提案
したのでこれをゼツリオ氏に
報告の上ゴエス將軍邸にて多
數閣僚并に革命首腦部集合凝
議の上該案を採擇、その場で
各執政官宛の電報文案を作成
したが、これはゼツリオ氏が
政權を握つた最初より、執政
官は政治問題に干渉すべから
ずと嚴達せる趣旨を踏襲せる
ものとされてゐた

スル規定ハ法律ニヨル
 右修正案の提案理由として
 業苦は世界的であ
 りて説明し……一九二八年
 マーナで開かれた第六回汎米
 會議にブラジル代表が提議し
 採擇された「アメリカ諸國は
 各移民群受入における便宜を
 考へ各自國の利益擁護の爲適
 當と認むる處置を採り得る權
 利を留保す」なる申合せを引
 用しアメリカ代表もそれに同
 意したと述べてゐる

るが右につき外務省高

若しブラジル議會において該案を採擇することゝもなれば極く近年において開始された對伯日本移民の受ける打撃は莫大なものだ、成るべくならブラジル政府がこれによつて日伯兩國の親善關係を阻害せぬよう措置を採られんことを期待してゐる。

既報の通り聖州議員團は去る

日付を以て臨時政府大統帥同各空気を苦々しく思ひ最後まで初
省大臣並に各州執政官は第二次志をかへず若し形勢利あらすん
共和國大統帥たる被選舉權なしば棄權する決意までしてをる模
の如き修正を提出したが別項の様で、ウエンセラウ・ブ
報の如くゼツリオ氏が大部ス氏擁立説もが公式發表
分閣僚執政官並に議員から次なく假令それが實現されとも
大統帥候補に推された今日最實効なきものと體派されてゐる

日本に永住の

二かな朗
先頃大使の榮耀を退き畏くも我が天皇陛下下が天皇親善に努めた功を嘉みせられた旭日一等章叙勳の光榮に浴した前駐日伯國大使シルビオ・グルゼル・ド・アマール氏は退

京都に風雅な家を購入

をしたものは同大使が始めてはなく、前英國大使エリオ卿など奈良の一寺院で佛道に歸依して一生涯をこて精進したような人もゐるが、まづ極めて少い例である

當地新聞も亦この報道を載せてゐるが

日伯親善

られ旭日一等章叙勲の光榮に浴した前駐日伯國大使シルビオ・タルゼル・ド・アマラル氏は退職後も引續き日本に住むこととなり既に京都に風雅な家を買ひ永住の決心をしたと傳へられ、フジリ憲法議會で日本移民問題の嬉しい折柄、面白く對照をなしてゐる

グルゼル大使のように外國外交官の顯職にあるもので現職

て少い例である當地新聞も亦この報道を載せてゐるが

相場と市況

種別

力
ア
ミ
フ
エ
ジ
リ
ヨ
ン

二
ス
エ
ス
シ
ヤ
ル
ム
ラ
チ
ー
ン

等

四級品
(一)
ス
ペ
シ
ヤ
ル
ム
ラ
チ
ー
ン

黃一俵

撲つたり撲られち

館事館裏庭で活劇
……その他……
七日午後聖市總領事館裏のキ
タールに勸業部勤務青木技手
コチャ譯住人某との間に樹膠
り、前者は棟瓦で全治一週間
受ける裂傷を肩間に、後者は
ルダデ街日本俱樂部で第十回
同仁會 總會 同仁會では来る
三十日午後七時
半より聖市リベ
ラ
も七月には竣工、八月に開通式
舉行の豫定

てたプロミツソン産業
周亭で関係した青木玄

電化に開眼し、カフエ・マデリーノ
カフエ・マデリーノ
廿三年の洗練されたサ
ービスで、我々のカフ
エーとして皆様が御集
ひになります

Brasil Ltda
Paulo

▽視察 滞在
▽農作 米、
珈琲
樹に
▽海抜 六〇〇

たところ、官吏の一端を發し、青木村と

すとカン」に遊覧。忙も其
 市近郊蔬菜業組合懇談會に基
 の出席せるを幸ひたを語つた
 ところ確かに言つたと明言、
 然らばその旨を書けとベンと
 紙を附きつけたが其應ぜず兩
 人すつたもんだの揚句、一徹
 の青木技手勘癪玉を破裂させ
 庭へ出る酈づくで行こうとい

lonizadora
 Caixa Postal, 29

▼土地 〓四〇
 ▼支拂 〓五回
 ▼交通 〓至便



種別
等級
四級品
(現物)

ロイ	スベシヤル	(俵)	七〇〇〇〇六〇〇
リヨ	アマレリニヨ	(俵)	四、八〇〇一五、〇〇〇
一 ジ ヨ ン	ムラチニヨ	(俵)	二、〇〇〇一四、〇〇〇
タ	黄一俵	(〇ギロ)	七、〇〇〇一六、〇〇〇

Caixa Postal, 2975 - São Paulo

卓効の如き
病者の難
全快！

治療機

イ

全世界に名聲
を馳せたる野
一色蒸熱電氣
治療普及機
英米獨最特許

！

イー商會
南米總支店
サンパウロ
治療時間
九時—五時

Av. Condessa S. Joaquin, 42
Caixa Postal, 465
Telephone. 7-2206

夜取量並型 **A50%**

い兒で樂に暮し度いは切手
 軒同封御希望下さい、實行容
 の理想をお教へします

Isura, Taqumi Mizusawa
 Rua Inconfiança, 4-12
 Bauri, N. O. B.

金買入 寶石、指輪
 首飾、義齒
 金一グラムに付十三ミルまで
 買ひます、銀白金も買ひます

Regulator Fox
 R. Quintino B. xuyhua, 11

期總會を開催し昭和八年度事
 業報告をなし後左の事項に
 討論すると

昭和九年度事業計畫及豫算
 案審議の件

交り選舉の件

御挨拶

拜啓各位益々御清榮の段大慶の至りに存じます
 陳者私儀來る四月二十日サントス出帆のもんでびでお丸
 て家族同伴一時歸國致す事になりました
 在伯中は種々御交誼御引立を賜り又出發に際しましては
 大の御饒別を辱ふし御厚情の程深謝致して居ります、一
 御禮狀可差上苔の處乍略儀に紙上御禮申上ます
 退伯に際し各位の御健康と御多幸を祈り上ます

敬具

愛媛縣人

齒科醫 松岡政一

在プロミツソン 外家族一同

日本人各位

NIPPAK SHIMBUN

Jornal Japonês de maior circulação no Brasil

Anno XX

São Paulo - Quarta-feira, 18 de Abril de 1934

Num. 880

NIPPAK SHIMBUN

Director-Proprietario:
SACK MIURA

Redactor da pagina brasileira: José Solé

Redacção, Administração e Officinas:

Rua da Liberdade, 144-A e 146

Caixa Postal, 375

Telephone 2-3926

Endereço Telephonico: "Nippak"

SÃO PAULO - Brasil

ASSIGNATURAS

Para o Brasil

Por anno 30\$000

Por semestre 16\$000

Numero avulso \$500

Para o Exterior

Por anno 60\$000

Anuncios

Temos á disposição dos interessados

uma tabella completa de preços para

anuncios nesta folha. Telephone 2-3926

Sobre a restrição da Imigração

Tendo sido communicado ao Ministerio das Relações Exteriores do Japão, pelo sr. embaixador no Rio, sr. Hayashi, o projecto ora em discussão pela Assembléa Constituinte brasileira sobre a restrição da entrada de emigrantes no Brasil, um alto funcionario da chancelleria nipponica declarou, que se a Constituinte Brasileira approvasse o projecto em questão, os novos regulamentos prejudicariam consideravelmente a imigração dos nacionaes do Japão, que ha pouco tinham começado a fixar-se no Brasil. Acrescentou que os meios officiaes japonezes esperavam sinceramente que o governo brasileiro faria o possivel para conservar e augmentar a boa harmonia das relações entre os dois paizes.

Homenagem a caravana medica que visitou o Japão

Pelo consul do Japão em S. Paulo sr. Uchiyama, foi offerecido aos membros que compuzeram a embaixada medica brasileira que visitou o Japão, um sumptuoso chá dançante nos salões do fidalgo Trianon, na noite de sabado proximo passado.

Foi uma reunião que teve alto cunho de distincção, decorrendo a reunião num ambiente de elegancia e cordialidade, tendo a ella assistido a fina flor da elite paulista.

Foi elevada a cotação do ouro

Foi annuciado pelo Thesouro publico japonês que a partir do dia 7 do corrente, o preço da compra do ouro foi elevado, de duzentos e sessenta e cinco yens por gramma, para duzentos e noventa e cinco yens.

Um desmentido

TOKIO, 9 — O Ministerio dos Negocios Estrangeiros oppoz formal desmentido ás informações propaladas por alguns organos da imprensa estrangeira, segundo as quaes o governo japonês teria dirigido ás autoridades de Pekim, por intermedio do exercito de Kuang Tung, um ultimato em que exigia garantias para segurança do imperador da Mandchúia, durante a visita que este pretendia fazer ao tumulo dos seus antepassados, em Pekim, acrescentando que o soberano mandchú não tem absolutamente intenção de visitar essa cidade.

Noticias e telegrammas do Japão

(Serviço especial do NIPPAK SHIMBUN e dos Jornaes)

PELA POLITICA

Tempestade passageira

O sr. Hayashi, ministro da Guerra, dirigiu-se ao chefe do governo, visconde Saito pedindo demissão do cargo, por ter sido um seu irmão, antigo prefeito de Tokio, condemnado a dez mezes de prisão, como implicado num escandaloso mundial.

O presidente do Conselho esforçou-se por persuadi-lo a continuar na gestão da pasta.

O visconde Saito, depois de conferenciar com os varios membros do ministerio, declarou á imprensa que o problema da substituição do general Hayashi somente poderia ser resolvido de accordo com a opinião do principe Kanin, chefe do estado maior do exercito.

Noticias de ultima hora confirmam que o general Hayashi continuará á frente do Ministerio da Guerra.

A decisão do general Hayashi, de continuar á frente do ministerio da Guerra, foi determinada pela intervenção do general Hyda, vice-presidente do conselho superior de guerra, e do general Kanin, chefe do estado maior, que accorreu immediatamente á capital.

Em torno do programma governamental do primeiro ministro Saito

O primeiro ministro Saito, conuocou, a 10 do corrente, os demais membros do gabinete para uma reunião na qual expoz os resultados de uma recente visita que fez ao principe Saionji, consultor do Imperio.

O visconde Saito declarou aos ministros presentes á reunião que o decano dos estadistas japonezes lhe dirigiu caloroso apello para que continuasse á frente do governo.

O gabinete approvou a decisão do primeiro ministro de proceder com a mesma energia na execução do seu programma politico e de realizar as reformas de que se cogita, tanto em materia de politica estrangeira quanto em relação ás questões de ordem interna.

Os ministros approvaram, por unanimidade, uma resolução recommendando ao governo que apresse a execução dos diversos

projectos já elaborados e particularmente que prosiga nos esforços em prol da restauração financeira, da modificação do systema de impostos e da reforma do ensino, de modo a organizar um plano mais preciso e que permita resolver as questões culturais e os problemas agrarios.

O suicidio do famoso sportman Satoh

Foi infelizmente, confirmada a noticia do suicidio do famoso tennista Satoh.

Satoh contava 26 annos de idade e fôra o capitão do team japonês que participou da disputa da taça "Davis".

Eis como telegrammas de Singapura noticiava o facto:

"Foi cerca das 23 horas do dia 6 que o companheiro de "cabine" do tennista japonês Satoh verificou que este havia desaparecido.

Iniciaram-se logo as pesquisas que prolongaram por sete horas, afim de encontrar o, até o momento em que foi lida a carta por elle deixada em sua cabine e pela qual se veio a saber que se tratava de um suicidio.

Na carta, dirigida ao Capitão do navio, Satoh lhe agradecia as amabilidades que lhe fez no correr da viagem e deaculpava-se por lhe causar aborrecimentos. Redigira tambem o seu testamento.

Durante a travessia Satoh se mostrava nervoso e declarava não desejar pessoalmente ir á Europa e que deixava o Japão unicamente por instancia da Associação Japoneza de Tennis.

Satoh sentia-se doente e deprimido e deagradava-lhe a ideia de afastar-se de sua noiva. Finalmente, mais nervoso, telegraphou á Associação Japoneza de Tennis, durante a escala em Singapura, afim de obter autorização para regressar.

A Associação recusou-se a attender o pedido e Satoh desesperou completamente. A tragedia se verificou horas depois da partida de Singapura.

Sete dos directores da Federação Occidental da Associação Japoneza de Tennis, resolveram pedir demissão dos respectivos cargos, por julgarem que a Associação é indirectamente responsável pelo suicidio do famoso campeão.

Commemoração nippo-americana

A agencia Havas informa de New York:

"Em discurso que proferiu no almeço com que a Camara de Commercio dos Estados Unidos commemorou o anniversario da assignatura, ha oitenta annos, do primeiro tratado de commercio entre este paiz e o Japão, o embaixador nipponico, sr. Hiroshi Saito, declarou:

"Nossas duas nações estão destinadas a trabalhar em commum com as outras nações irmãs no interesse da paz e da amizade, não somente nas regiões do Pacifico, mas no mundo inteiro".

O embaixador Hiroshi acrescentou:

"Os tratados de paz e amizade e as relações commerciaes foram a semente da amizade norte-americana e japoneza.

Nós que conhecemos a historia das nossas relações mutuas, não podemos silenciar diante das palavras dos que affirmam a existencia do perigo de guerra entre os nossos dois paizes".

Falou tambem o sr. Stanley Hornbeck, chefe da secção dos negocios do Extremo Oriente do Departamento de Estado, que declarou que os exitos commerciaes dos japonezes resultavam dos esforços cooperativos notavelmente efficazes da parte de uma nação que os occidentaes faziam bem em imitar".

Explosão numa mina

TOKIO, 9 — Produziu-se formidável explosão nas minas de carvão de Fukushima, ao Norte desta capital. Ficaram sob os escombros 50 mineiros. Accredita-se que todos tenham succumbido.

信用ある
骨粉
アニヤンガバウー街一七〇
電話二二二・郵函七一
頼信商店

O algodão brasileiro

O Boletim Commercial do Ministerio das Relações Exteriores do Brasil, fez o seguinte communicado:

"Aproximando-se a nova safra brasileira de algodão, não é de mais salientar as possibilidades que, para o mesmo producto, offerece o mercado japonês, segundo o que acaba de alterar, ao Ministerio das Relações Exteriores, a embaixada do Brasil em Tokio e o consulado geral de Kobe, a cujas iniciativas se devem os primeiros negocios realizados quasi no fim da safra passada.

Esses ensaios começaram com os pequenos embarques de 60 a 66 fardos, seguidos logo de uma encomenda de 300 fardos e mais tarde de compras que se elevaram a 2.990 fardos, perfazendo o total de 3.416 fardos, no valor superior a libras 40.000.

Ultimamente, já têm sido passadas novas encomendas, que fazem supôr que a corrente de exportação tende a permanecer.

Segundo estatísticas já divulgadas, calcula-se a safra brasileira em cerca de 160 milhões de kilos para um consumo interno de, aproximadamente, 100 milhões, verificando-se a possibilidade de concorrer aos mercados mundiaes com perto de 60 milhões de kilos.

O Brasil já exportou, em 1929, regular quantidade de algodão, 48.728 toneladas, no valor de... 158.915.000\$. Dahi para cá essa exportação declinou constantemente até 1932. Foi de 30.416 toneladas, ou 84.602.000\$, em 1930; de 20.779 toneladas, ou 54.189.000\$, em 1931 e de apenas 515 toneladas, ou 1.787.000\$, em 1932. Entretanto, em 1933, teve augmento consideravel, 11.693 toneladas, ou 32.789.000\$, muito embora o preço médio obtido houvesse decido de 3.428\$ por tonelada, em 1932, para 2.804\$ no anno findo".

Impressos?

Procure a

TYP. "NIPPAK".

Rua Liberdade, 146

São Paulo —

Problema imigratorio japonês nos Estados Unidos da America do Norte e no Brasil

T. U.

I — A lei de 1924 - U. S. A.

Entre o Japão e os Estados Unidos, não existe nenhuma incidencia pendente, tanto no ponto de vista economico, como no de politica, que seja capaz de provocar luta armada. No entanto não podemos negar a existencia do desacôrdo ou divergencia nas relações entre os dois, por conseguinte ha quem prevê a estourada da guerra. E' puro engano as divergencias existentes entre esses paizes, são produtos da falta de compreensão, ou pouca vontade de compreender por parte dos norte-americanos sobre o Japão e japonês.

A causa capital do resentimento do Japão, para com os Estados Unidos, pode ser attribuida á oppressão deshumana imposta pelos norte-americanos desde 1906, sobre os japonezes que residem no Estado de California e ás legislações injustas de anti-japonezes, sobretudo a lei de imigração de 1924.

II — Mytho nordico

Quem conhecer o historico da legislação americana sobre a imigração e observar a sua tendencia, notará logo que domina a mentalidade dos estadistas e sociologos contemporaneos norte-americanos, uma convicção errônea pela vaidosa superioridade da raça nordica.

Os chamados "imigrantes velhos (old immigrants)" nos Estados são compostos, principalmente, de elementos procedentes de nordicos. A maioria dos imigrantes entrados nesse pais da ultima parte do século XIX em diante consiste em elementos oriundos dos países mediterraneos que são muito diferentes dos primeiros tanto pela ethnologia como pela religião. Por isso os chamados "imigrantes velhos" de norte-europeos com o intuito de formar o povo norte-americano exclusivamente pelos elementos nordicos, vaidosamente, convencidos de serem superiores, tentaram excluir os imigrantes procedentes dos países mediterraneos e assim foram legislados as leis sobre a imigração de 1917, 1920, 1922 e 1924.

III — Inassimilabilidade do japonês é o "pretexto yankee"

Ao passo que o movimento contra a imigração japonesa nos Estados Unidos teve a sua origem na politica racial adotada contra a raça negra e indios, a pretexto da inassimilabilidade do japonês.

Em regra a assimilação de uma raça só se opera quando se acha nos tratamentos com direitos iguaes e o meio social da mesma condição, mas os japonezes no Estado de California estão em interdição, pela lei estadual, nos direitos de adquirir ou arrendar propriedade imovel, de parceria agricola, até de tutoria para os filhos menores, sendo vedado o matrimonio com a raça branca e negado o direito de naturalização. Nessas condições como poderiam os japonezes assimilar pois são interditiados de assimilar? Finalmente, como se não bastassem todas essas medidas injustas, a lei de imigração de 1924 prohibiu aos japonezes domiciliados nos Estados Unidos até o direito de chamar seus paes, filhos e esposas. Haverá outros exemplos de legislação tão deshumanos, como essa, em qualquer outra parte do mundo? E' de notar que esta famosa lei de Imigração foi aprovada na camara alta norte-americana no ano seguinte da grande calamidade sismica do Japão pela humilhação deste. Nessa distincção injusta e desigualdade de direito, não é possível que se opere a assimilação dos japonezes. Quem impede a assimilação dos japonezes nos Estados Unidos são os proprios norte-americanos, que para excluir-lhes, alegam a inassimilabilidade dos mesmos. Que contradição!...

E' muito natural o resentimento dos japonezes causado pela attitude anti-japonesa dos norte-americanos. Resumidamente, esse que vai accumulando até fomentar sem querer, os graves obstaculos nas relações entre os dois paizes.

IV — O movimento a tendencia pela reforma da lei 1924

O movimento ultimamente surgido nos Estados Unidos no sentido de permitir entrada dos japonezes, applicando-lhe a "quota" como se processa nos imigrantes europeos, reformando a lei de imigração de 1924 é muito significativo, pois se isso for realizado trará não só um feliz estreitamento das relações entre dois paizes, mas tambem uma garantia para tranquillidade do Oceano Pacifico e para a paz duradoura mundial. Por isso não podemos deixar de desejar, pela felicidade da humanidade, que seja realizada essa reforma de legislação americana.

Encarando o problema imigratorio japonês no Brasil, observa-se o facto interessante; que tanto o Governo do Japão como o povo japonês e os proprios imigrantes se esforçam ardentemente, para não cair novamente, na mesma situação amargamente experimentada nos Estados Unidos, applicando todas as forças para e tornarem poderosos e indispensaveis elementos para o desenvolvimento economico nacional e se adotarem como os bons cidadãos brasileiros.

(continua)

Biographia do nobre Imperador Pu-Yi

O imperador Kang-Té ex-Pu-Yi, ao subir ao throno a 1.º do corrente foi coroado pela terceira vez em seus vinte e oito annos de existencia agitada e errante.

Pu-Yi, filho de Tzai-Feng, principe de Chun, contava menos de 3 annos quando foi escolhido pelo Grande Conselho do Imperio Chinez, para occupar o throno que, em successão ao Imperador Uang Hsu, que falleceu no dia 14 de novembro de 1908. Vinte e quatro horas depois todas as legações estrangeiras recebiam copia de um edital lançado em nome do menino imperador Hsuan Tung, annunciando a morte de Imperador e annunciando sua ascensão.

O Hsuan Tung sempre foi perseguido pela intrigas. Pôde dizer que seus primeiros dias de segurança começaram na Mandchuria, quando assumiu o cargo de regente do Novo Estado.

Pu Yi nasceu em fevereiro de 1906, ignorando a data exacta. Após a victoria dos exercitos republicanos foi obrigado a abdicar em 12 de Fevereiro de 1912. Foi autorizado a conservar seu titulo de imperador dos mandchus, recebeu a segurança de que nada soffreria pessoalmente e o governo lhe concedeu uma pensão de 4 milhões de dollars em papel moeda chinês. Pu-Yi retirou-se á Cidade Prohibida, em Pekim onde continuou a reinar em um territorio de menos de uma milha quadrada.

Na manhã de 1.º de julho de 1917, Pu-Yi foi despertado por um grupo de nobres mandchus que o collocaram no vestuário throno. Mas uma vez Pu-Yi foi coroado e proclamado imperador da China.

O general Chang Chun e seus exercitos tinham occupado Pekim mas foram expulsos pelas hostes republicanas. O novo imperio durou menos de 15 dias. Pu-Yi ainda conserva o titulo de imperador dos mandchus. Casou em dezembro de 1922 com a neta do general Chang Chun, o caudilho que tentou restaurar o imperio.

Após a occupação de Jekin em outubro de 1924, pelo general Feng-Yu-Hsiang, Pu-Yi foi despojado de todos os seus titulos e haveres, temendo um attentado foi residir com seu pae fóra da Cidade Imperial. Pouco depois desse incidente procurou refugio na legação japoneza e mais tarde fixou residência na Concessão Nipponica em Tientsin. No dia 9 de março de 1932 Pu-Yi assumiu a chefia do poder executivo do Estado de Mandchukuo, sob o titulo de "Regente".

E finalmente subindo ao throno mandchú a 1.º do corrente reinará com o titulo de Kang-Té.

五、四、三、二、一
十支少校體植面リ口場
七拂に資確、樹換1に所
コ見、實柑11マ近
ンて土保橋極三きセ
時十地等優ロ、好
拂五買すの良學場ト
にひコ入、優李テ生所
てナン代、良一三等、ル
實らト二、種年城極聖線
却ばスト、年一、餘低市イ
十以コ、年リ、のヘケ
以三上ン、より三地汽はケ
上コ合ト、八迄、貨車ラ
のン計ス、入ス建、生の位に自
買ト約餘、入ス三建、迄の最通車
に半十設、迄の最通車、の約上ひに
は金五物、の約上ひに、の四等つて
渡早入コ、の百境、四ロ
いリン開、約五界あ五半
邊のト聖、三十にり十日
勝後ス裁、本、清、分本、人
泰五、植、育、本、清、分本、人
照ケ、植、育、本、清、分本、人
一會年、成、費、皆、荷、小、附、植
親視、費、皆、荷、小、附、植
郎察ひ、其、他、約、最
はな、左、記、ば

聖市郊外の農場賣却